

伊藤信孝

マエジヨ大学・客員教授 国際学部

前報でタイの大学の管理運営のまずさを書き、明日は我が身となるかもしれないと書いたが、それが現実のものとなり驚きである。ことの経緯をここに少し紹介すると次のようである。悪いことが重なるときはよくあるが、この時も運悪く、ちょっとした不手際(?)で購入してから一度として生じなかったことが自分のスマホに起きた。たまたま大学の食堂で昼ご飯を食べるべく注文したメニューを待っていると、慣れ馴れしく入ってきた一人の学生が自己紹介を含めて話しかけてきた。隣国からの留学生で、奇しくも筆者が最近新しく移籍した国際学部の学生だという。運悪くそのときはスマホを持っていなかったのだ。その学生を連れて自分のオフィスに招き、LINE でのアカウントを交換した。その時、余計なことにもう一つの iPad の調子が悪く、できればチェックしてくれと頼んだのが悪く、彼はしばらくチェックに精神を集中していたが、1時間そこそこあれやこれやと触っていたが、その後フィニッシュと言って出て行った。その後スマホをみると LINE のアイコンが見当たらない。せっかく友達になれたその学生のアイコンももちろん見当たらない。260人ほどのアカウントが消えてしまい、その時から不便な生活を強いられることになった。その学生にはその後も会うことはあったが、怒ってみても仕方がない。学生も申し訳そうな顔をしているのを見ると、それ以上は何も言うことはない。というわけで多くの連絡が LINE を通じて送信されてくる今日この頃であるため極めて不便であり、自分以外の人が何をしているのか知ることはない。そうでなくてもタイの大学(に限らないが)では常に情報が来るのが遅く、イベントが始まる1日前などが当たり前である。例によって今回の国際ワークショップについてもプログラムが届いたのは当日の朝といういつもの対応であった。ただ、ここで記したいのは、この情報配信の遅さもさることながら、ワークショップの開催場所が大学から20キロほど離れたチェンマイ市内のホテルであることから、そこまでどのように行くかという問題があった。ワークショップは朝8時の登録に間に合うようにホテルに行く必要があり、その後の開会式に参加する予定になっていた。2日前に事務に行きスタッフに自分は車を持っていないので、どうすればいいのかと尋ねると、明後日の朝7時にこの建物の前に来い。ここに来れば大学の車が待っているのだからそれに乗ればよいという。安心していたら翌日になって同じスタッフが筆者のオフィスを訪ね、大学の車は来ないことになったと言う。驚いてその理由を尋ねると他の参加者は皆が自分の車で行くからだという。筆者はこの答えを聞いて愕然とした。どこかおかしいと思いつつも別の方法を考えなければならない。幸い同じワークショップに参加する一人の知人が親切に彼の車で同行してくれることになったので初日の対応はできた。しかし「その日の午後には自分の講演発表がある。知りたい情報は、何時にどの会場に行けばよいかを知る必要がある。チェアマンに聞くとすでに Group LINE に送信済みであるという返事である。その返事に沿って、iPad を開くがページ数が多く、講演発表のセッションの分類(カテゴリ)が何なのかもわからないので探さねばならない、画面に表示される文字が小さいので拡大表示してひとつひとつ探すのでは時間もかかり大変である。やむかたなくインドネシアからの学生に依頼して何とか必要な情報を入手して、講演発表に備えたが発表

は2つあり、よくよく調べると発表の時間が重複している。さらに最初の発表の時間が来て会場に出向くと、まだ筆者の前に3人ほど発表者がいるということで、ファイルをダウンロードして出直すが、ファイルがうまく開かず、後の発表者に先に順番を譲ってしばし待つ。しかし気分が悪く、精神的に落ち着かない。わずか5分ほどの発表時間なので言いたいことが言えず、不満ながら終わらねばならなかった。発表のあともう一つの会場に急ぐ。結局その会場で最後の講演発表者となった。しかしコロナ禍で長年あっていなかった古い知人が幸いにも筆者の発表を聞きに来ていて、「非常に感動した。もっと詳しく聞かせてくれ」ということであつたので、後日再会することにした。というわけで初日は何とか無事に終わった。帰りは、朝一緒に同行してくれた知人も所要があるということで昼食後に早々と帰宅しているので一人で帰宅する必要がある。しかし長年の知人に夕食を誘うという予定も考えていたが、相手の方から逆に誘われ馳走になった。帰りはタクシーでの帰宅である。アパートに到着して翌日の予定を見てみると、朝の8時に同じホテル前にバスが来ることになっている。あわてて副学長に連絡して、困っているで何とかしてほしい。できなければせめて最初の見学先まで送ってほしい。そこで合流すればあとは何とかなると懇願したが、答えは関係者に連絡したということであつたので、メールで連絡するが返事はない。仕方なく午前のプログラム参加は取りやめ昼食からの参加にすることにした。昼食は大学となっているが大学のどこに行けばよいのかわからない。上記のチェアマンに連絡をするとホテルだという。筆者にはわからないので、事務に行っても誰もいないので途方に暮れて、廊下の椅子に座っていると、一人の中年の婦人が「誰かを待っているのですか？」と尋ねてきた。事情の背景を話していると、「あなたは伊藤先生ではないか」と尋ねてきた。「そうです」と答えると、「私はあなたがこの大学に毎週1度大学院生の指導に来てくれていたのを覚えている」と懐かしく話してきた。そうこうしながらも大学のキャンパス内のホテルの関係者に電話連絡をして、「そこまで行くには距離があるので」と言って、学内移動に使われている電気自動車を手配してくれた。「本当にありがたく、大変嬉しかった」というのが素直な思いであつた。チェンマイ大学に籍を置いているときのことだから、かれこれ10年も前になるが、いまだに筆者を覚えていてくれたことに感謝した。翌日その人を尋ねて丁寧にその親切心に感謝の意を伝えた。この事例の一つからも大学が昔とは非常に変わっていることがわかる。しかし残念ながら「良くなったかといえば、どうもそうは思えない、むしろ悪くなったように思えてならない」。筆者を知る人はこの例からもわかるようにまだまだ沢山いる。卒業生も教員もいるがそのほとんどがどうしているのか知らない。筆者がこの大学に移籍している情報が拡散していないことがその原因であると推察するが、公的に関係者に正式に紹介されたことはない。例えば定期的にニュース・レターが学部レベルで配信されるなどがあればよいが、一切ない。参加や出席要請が来るのはイベント当日の1~2日前、時には30分前ということで、極めて準備不足のままの参加になるのが日常茶飯事である。急に言われてもそれなりの準備が必要である。例えば公式行事となればカジュアルな服装でなく、必ずネクタイ、スーツ着用が必要である。カジュアルでよいと言われても恥ずかしい思いをするのは本人である。また大学にとっても、学生に対する教育の面からも良いことではない。この辺のけじめはきっちりつけて対応する事が必要である。(これだけは何があっても譲れないという気持ちで、今までやってきた)

上記した車のキャンセルについても、公的と私的の正確な判断がされていないから、常識外れの判断と対応になる。公用車をキャンセルするというのは間違った対応である。筆者ではなく、参加者に対

し何か対応しなければならない。非常時に即対応できる準備をしておくのが共催大学の心得である。ワークショップ開催中にこのことを聞いた参加者の誰もが、大学側の共催機関としての対応の不備を強調していたことから、如何に常識から外れているかを伺い知ることがわかる。残念な事実である。誰がどこでどのような指示をしているのかわかりかねるが、ちょっと国際化への理解のレベルが違いすぎるのではないかというのが筆者の素直な意見である。チェアマンとしての役割、なすべき義務と責任が十分に理解されていないのではないかと……と思わされることが多い。前もって予定が知らされることが少ない上に、誰に連絡をすればよいのかという無責任体制がまかり通っている。Reinventing 大学に向けたワーキング・グループもあるが「自らがやる気がなければ、意味はない。その証拠にいつまでたっても何も変わらない現実がそれを物語っている。まさか「やっているという姿勢を見せている」だけのジェスチャーではないであろうと信じたいが……………。悲しいことに筆者もこのワーキング・グループに席を置いている。尻こそばく恥ずかしい思いもあるが、今のところ手の打ちようがない。ことが大きくなって外部に知れ渡り、大学が大恥を晒すという事態だけは避けたいと願っている。

以下の写真はオープニング・セレモニーでの幾人かの要人のスピーチと昼食時の様子(左端)

